光

時坂梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光

【Ｎコード】
Ｎ２２８３Ｚ

【作者名】
時坂梢

【あらすじ】
男は友人の作品が飾られているという芸術展へ行った。関心しながらみていると、恋人同士と思われる二人組みの会話が聞こえてくる……。

美術展に足を運んだ。ここで友人の作品が展示されているというので、それで来た。

どれも素晴らしい作品だと感じたが、とりわけ私の目を引きつけて離さない絵画作品に出会った。それは抽象的なモチーフをあしらったもので、若干紫の混じった赤と濃紺の二色が、キャンバスの中心を軸として放射線状に広がっている。第一印象は、宗教的没入の暗示でもあり女性器の暗示でもある、そう感じた。

遠くから全体をぼかし視ると荒々しく大胆な印象を与えるが、近づいてじっくり眼を通してみるとおそろしく繊細な筆致であった。抽象画というのは直感でも運任せでも、ましてや適当などでは決してなく、「こうでしかないのだ」というような、妙な説得力を醸していた。

さまざまな距離、さまざまな視座でじっくりと鑑賞する。そろそろ十分に楽しんだ、そう思い、立ち去ろうと歩き出す、とたん、背後からヌルリと生温かい視線が飛んできた。私は思わず振り返る。絵画の中心点に向かってフロアの空間全体が吸い寄せられるような、そんな錯覚に陥った。どうやらあの放射線には眼くらましの効果もあるようだ。後で知ったのだが、これが友人の描いたものであった。私はこんなにも素晴らしい作品を創ることのできる友人を心から尊敬した。

別のフロアには、日の光が取り込まれていた。

もう日没にさしかかっていたが、部屋はブラインドのレースの縁から差し込む夕暮れの金色の光であふれていた。

ここには写真をモチーフにした作品があった。女性が写っている写真を巨大なキャンバスに描き写し、全体をぼかしたものが数点、同様の手筈で風景写真を描き写したキャンバスに、アクリル絵の具を水しぶきのようにペイントした作品が数点、展示されていた。写

真がもたらした現実感に対する揺さぶり、もしくは現代においての絵画制作という困難さを自己言及的に描き出しているのだろうか、何よりこれほどまでに高度な技術を惜しげもなくつぎ込んでいるのは圧巻だ、そんなことを漠然と思っていると、となりに二人組みの男女がやってきた。

「うーん、現代美術ってぜんぜんわからない」と眉間に皺を寄せながら女、「これって何を現しているの？」

隣の男は答える。「本当の意味なんて何もないよ。現代アートって正直言ってもの勝ちみたいなところがあるからね」

「見るのにいちいち説明がいる芸術ってどうなんだろうな、私はそんなの芸術じゃないと思う」

「まったくだね、僕もそう思う。説明なんてなくても、そのまま見て美しいと感じるのが本当の芸術さ。言葉でごまかしているだけさ」

「なんで世界中の誰もが理解できる素直な作品をつくらないのかな？」

「芸術家は天邪鬼なんだよ。ひねくれ者なんだ。それを評論家がいろいろと深読みして付加価値をつけるんだ」男は隣の女の顔をさりげなく伺う。「言葉が大事なんだ。けっきょくはプレゼン力を競ってるようなものだね」

「好きなものを見て可愛いな、楽しいなって、そういう気持ちのほうがよっぽど大事だよね、それで良いよ、アートなんて嫌いだな」

女は口をすぼめて、腰に手を当てる。男は、女に話を合わせて気持ちに取り入りたい感情と、自分が美術館に誘ったのだからなんとかこの時間を意味のあるものにしたいという感情との、相反する葛藤に悩まされている、そんな様子だった。男は慎重に言葉を選ぶ。

「つまり、本質は〈投機〉さ。高くなりそうな作品を見抜いて、高くなったら売る。現代アートの本質は投機だね。買う人は投機目的でアートと付き合っているんだ。それをよくあらわしている例がある。世界で最も良く売れている現代芸術家上位二十人のうち、驚くことにね、なんと中国人作家が十一人もランクインしているんだよ。

すごい数だろ？　十一人、半数だよ。これは中国経済の期待に比例しているんだ。これが投機といわずになんと言うのだろう。そして値段を高くするにはね、芸術家のネームバリューの重要になってくる。美術家は皆それが欲しいから、恩師を頼り、組織に入り、社交界に参加する。そうやってネームバリューを得て、値段を吊り上げていくんだ。意味がないといえば意味がないけどね」

わけのわからない対象から理解できる対象となった目の前の作品、それを見て溜飲を下している女のまなざしに自身を得て、男は続ける。「今まあ、僕はマーケティングの仕事をしているから、似たところがあるね。参考にはなるよ」

私はなんだか、今までの気持ちがすべて嘘であるような気持ちになった。この場所にいる意味も、今日の体験もすべて無意味になった気がして、急ぎ足ですごすごと家に帰った。

しかし、家でじっくりと思い起こしてみると、やはり私の芸術体験に偽りはないのだという結論に至った。投機は結構、しかし、買い手と作り手を同じ論理の上で語る彼らに、芸術のなんたるかをまったく理解する気のない彼らに、私は激しい怒りを覚えた。私は本当に、心の底から、人が何かを創り出そうとする意志、その気持ちに触れた時、幸福になる。涙が出てくる。逆にそうした気持ちを理解出来ない人の不用意な態度や発現に出会うと殺したくなるし、「死んでしまえ！　きさま！」と心の中で何度も何度も反芻する。

数日後の喫茶店、友人に作品の感想を伝え素晴らしかったと賞賛した。そしてそのときの苦渋の想いを伝えた。友人は「まったくだ、俺は君にまったくもって同意するよ」と言ってくれた。私は涙がでそうなくらい嬉しく、そして救われた。

「海外のギャラリーに飾らせてもらったときに実感したんだ。向こうの客たちはみんなとても熱心に勉強しているんだ。俺らアーティストなんかよりもぜんぜん勉強している。長い長い美術史からの続きで俺らを見ている。うむむと小難しい顔をして、俺の作品をずうっと見ているんだ。それでぱっと晴れやかな顔をする、あれは知的

興奮ってやつなんだろうな。ところがさ、この国はダメだよ。勉強したくない、でもいっちょまえに物申したい。ようするに、おこちゃまなんだよな。海外の日本論でよく使われるレトリックの常套句でさ、インマチュアとかインファンタイルなんて言われるだろ、最近よくわかるようになったよ」

「すまない、イン……なんだって？」

「未成熟とか子供っぽいって意味だよ、つまり幼稚に見えるんだよ。ダグラス・マッカーサーが言ったらしいんだよな、〈日本は12歳の子供のようだ〉って」

私は友人のいった未熟さというものが良く分からないでいた。私は生まれてから海外に一度もいったことがない、それもあるのかもしれない。友人は温くなったグラスの水を一気に飲み干して、話を続けた。

「日本の敗戦と占領がさ、どういうわけか日本を去勢しちまったんだよ、それで日本はインポテンツと幼児退行の両方を引き起こしたんだ。父親の加護のもとでぬくぬくと肥えた子供だよ、俺たちは……戦争に……勝とうが負けようが、アメリカが育んできた資本主義経済をさ、温室で大事に大事に、育てて……膨れ上がったのが、この六十年間の日本だよ。そうして見事なまでに奇怪でグロテスクなものが育った。最近の漫画やアニメを知ってるか？　すごいんだぜ、昆虫みたいに大きな目をしてさ。髪の毛から何まで極彩色なんだ」

友人の話を聞きながら、ひとつのイメージが私の頭の中を支配しはじめていた。

「俺たちはさ、この国はさ、未熟な子供のまま、駄々をこねながら、それでも自分可愛さに生きてきたんだ。でもこのままじゃダメだろ？」ああ、と私は力なく答えた。

戦後六十年の日本のおどろくような成長は、それらは、原爆が爆撃機から投下され、広島にある細工町の島病院の上空約六百メートルで爆発するまでの、ほんの一瞬の夢まぼろしだったのかもしれない、そういうイメージが私の頭の中を支配した。ボルヘスの伝奇集のな

かの「円環の廃墟」という説話を思い出す、それは自分の人生や存在そのものが、実は誰かの夢のなかのものだったという話だ。その誰かが夢から目覚めるとき、自分の存在はどうなるのだろう？　そこで語りは終わる。同じように、広島に原爆が炸裂したあと、夢から覚めたあとの私たちはいったいどうなるのだろう？　そう思った。夢から目覚めて、自分たちがぐずぐずの水子のような存在であることがわかったとき、それでも私たちは子供でいいのだと、開き直れるだろうか。

「この近くに俺の工房があるんだ、よかったら見に来ないか？」友人は言った。私はぜひ見せてくれないかと応えた。

喫茶店の脇にある路地を抜け、ひとつ大通りを渡った。トタンで囲っただけのような廃墟同然の小さな工場、〈菅原ロープ〉と消えかかった文字。ここだよ、と二メートル四方の大きな扉――ビニールテープを短冊状に吊るした簡易扉――のなかへ入っていった。壁いっぱいに巨大な絵画が広がっていた。「ずいぶん大きな作品だ」「そうだね。これは海外向けに造っているんだよ。日本と違って、向こうで芸術を買う人は、家が大きすぎて、寂しい壁を埋めるために巨大な絵画を必要とする。だから大きな作品から売れていくんだ。小さな作品はあまり人気がない」「なるほどな、しかしこれは、どうやって外へ持ち運ぶんだ」「よく見てごらん。二つ切れ目がある、この作品は三つのキャンバスを組み合わせて構成されているんだ。オーソドックスなやりかただよ」正面から作品を眺めた、本当に巨大だった。縦三メートル強、横は五メートル近くあった。まだまだ描き始めといった感じで、荒々しい筆の跡は己の落ち着くべきところを探っているかのように縦横無尽に駆け巡っていた。「何を描いているんだ？」「まだわからない。おおよその設計図はあるんだけどね。本当のところはよくわからない。作品の核を探しているんだ。これからもっともっと神経を研ぎ澄ませていって、自分自身の、奥の奥へ潜っていくんだ。ここの精度を密度が作家の肝だと俺は思っている。どこまで奥へ潜っていけるか」そうか、とだけ私は応えた、

それ以外の言葉は見当たらなかった。外はもう日が落ちて暗く、友人は天井から吊るしてあるメインのライトではなく、作品を照らすための間接照明のスイッチを入れた。ブゥゥンという音が工場内に響く。明暗のはっきりとした境界線が立ち現れた。明かりには作品と友人、暗闇には私。入り口のビニールテープがひらひらと揺れる、生暖かい風が工場内を辿っていく。外からは自動車の音がかすかに聞こえてくる。

「岡本太郎って知ってるだろ、〈芸術は爆発だ〉ってやつ。あれを真に受けちゃった馬鹿たれがたくさんいるみたいだけれどな、表向きだ。俺ら芸術家はさ、ああやってピエロな態度で軽やかに舞っていなきゃらないんだ、でも裏では血肉を削って苦しんでいるんだ、死ぬほど勉強して死ぬほど本気でやってるんだ、でもそうは見せない、ポーカーのゲームみたいにな。だから俺らは偉そうなこといって悦に入っているディレッタントどもにいちいち怒っていちゃいけない。画面や筆致の中に魂を封じ込める、どんどん命を削って積み重ねていってそれでも、センスよく軽やかな顔立ちをしてなきゃならない、俺はそう思っているんだよ。だから、やつらが何を言っても、気にするな」

白熱灯の下で、微かに蠢いている水子を前に、私たちは一晩中語り合った。水子はまだそれが何かもわからないくらいに奇形でグロテスクであったが、この新しい光のもとでは、誰かが無神経で軽薄な言葉を浴びせても、ぜったいに過つことはないだろう。芸術家が罵詈雑言に耐えられるのはここに絶対の啓示を感じ、それを信じているからなのだろう。精神のうす暗い灯のもとでは、持っている人にしかものは見えない、私はその片鱗をたしかに受け取った。光は私をも照らしていた。

（後書き）

生まれてはじめて書いたものです。伝統的な手法でいっぺん書いてみようと思って、さらりとほとんど一筆で書き上げました。
あらためて読み返すと、あまり好きな文体ではないです。
しかし根底に流れている主題は、今でも大きくは変わっていないように思えます。

内容についてですが、「私」と友人が必ずしも正しいとは限らないということもちょっと頭に入れつつ、多義的に読んでいただければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2283z/

光

2011年12月8日03時05分発行